



2109
2





萬弥



甚く怪と不動明王不祈誓願。願く彼劔杵と取得さあゆへ。丹成て
 して祈り。不動の真言を誦して旦と暮されたる小頻小睡明く不覺小
 小倚りて眠る。小不動明王出現し。ひ告て曰く。彼骸骨は修前
 生此山小煉修して死す所の遺骨なり。持する劔杵と得人のあふ手
 陀羅尼三十遍般若心経百卷讀誦。然と取へし告す。思ふ事あり
 ず。小角歡喜。夢想のく。千手陀羅尼般若心経と讀誦して後劔杵
 と取果して骸骨自ら手と開れて劔杵と授けり。小角是と得て大不化
 び生涯身と離さず所持せり。偕大峯より紀州熊野へ還る路
 だ。三十八才ありて吉野の金峯山小登りて修行し。心と煉更數年
 統天皇九年丙申六十才己小年老て葛城の嶺より金峯山へ
 くと稍行悩まれん。緒の山神と應集。你小葛城より金峯山へ

山石橋を造れりて命せられり多ふと山神亦命小従ひ山石を運ひ岩橋を造り
準備せりける小角一言王の神ありて其形容甚ぞ醜るるを登出
戎耻緒の山神小告て自休夜母小橋を造りける是亦因て岩橋の成
造る更最遅りるを小角怒りて山神亦召集休何又橋を造るを
忌やと責叱り小角山神亦一言王神自出更之厭ひ我徒小告て夜の橋を
造るんとする更橋の成就する更遅くといひける小角大い嗔り一言王を
呼出神兄を以て両腕縛り則ち誓て曰将来我小等其修験の力ある者
有む汝が此縛索を解得せむ若我ひくれば者毎人を五十六億七千万
歳の後弥勒出世の時我解得せむとて道の谷底へと投中れり今
剛山の東小言王の洞とら所ありこれを歌あゆ
いろ小せん条乃岩より申絶ぬ明るるびりき葛城乃神

とよめて中絶る惡の本歌とせりける神通力ある行者あれたる金峯山末世
乃衆生と利益なき本尊と造り安置せんと三世諸佛小祈念し七日間登
夜忘し心経を續編して祈られり七日満ちる曉地藏菩薩出現し
小角が白筒様なる柔鞭の相ひて末世欲惡の衆生と化度する更能
と捉て遠小擲られり地獄菩薩即ち伯耆の大山飛行のりとも云或
ち吉野の投地藏といふ是かりとも細り其後三七日心経を編て祈られけ
まて七日間の曉弥勒菩薩出現し是も又小角の意小合されり
お拂三度目の眼と瞠り番と切て立行し七日間心経を編て祈られり七
日満ちる曉小金剛藏王出現し其相格色青く忿怒の面恐るるを末世
劍印と結んで腰に托へ右手小三股杵と把て立り小角大い怡ひ是を末世の
濁惡の凡夫を化度する小角小尊かりとて拓楠木と以て等身の金剛藏王の

像を刻み金峯山の釈迦窟小尊堂を建て安置しめり。如斯勇猛の行者も時の不肖免れ更なる不慮災難を出来小く其故は州の住人小従五位下韓國連廣足とい者有て小角が神変奇特あるを以て其門人とかり道に修行する小其勤行の行作甚厳密ゆて堪がさるるは廣足稍心小倦て修行を懈怠多と小角大に叱り散く小言辱められ廣足亦面々遠れ帰るる中深く小角を怨て都へ上り朝廷へ出役小角とす者邪術を行ひ愚民を惑し財物を貪り取りと天逆小逸奏去れ朝廷の諸臣小角の徳とす。廣足は逸言を信し帝へ悪言多奏聞し多かれ其者と召捕せよと詔するひきり身小依て公卿武士小命。葛城なる小角は拙へ馳向ひ召捕て奉りゆと令られ武士も領掌して葛城山より小角小對面し當今汝小脚不審の義ありま手間急に都へ来よと言われも小角取

て命小應せと我の臣玉の民小あらを世捨人あれ都へ召るるは猶たして向若く起され武士大に怒り。普天下王主小非る更なり卒士の賓王の民小亦ごとく習受あらんや。今此山も王の國土なり。你此山小拙を即ち王の民ありととを難トぐる小角嘲らひ此土王の國あるを去去りて空へ飛り去り空中小端坐して坐するふと武士も惱果擲捕て能く半と定してあゝ居る許なり小角是を見て微笑し頓て雲を踏で行方あらずあをれ武士小案相違し如何と云とと商議する小一人の者進て出我彼小角一人の老母あり小角生得孝心厚く。猪鬣を徑歴られも折れ歸て母と孝養するととされ彼老母と捉て都へ歸りあを小角母と慕ひく都へ上り徳小就きとと小ぞ最上実も此策妙なりと。第原の郷へ馳行小角の母は事母と捉へ駕車て都へ上りなる。案のゆく役行者母と人貸ふとれ力なく都へ上り朝庭へ

名告て出縛索小就い久間老母と免一と願れんが即ち願ふに
せ老母と免して古郷へ入され借るを小角と伊豆の大島流罪か行
りれりたるも神通自在を得ゆい行者なれば其大島の配所小
居りども夜に起行を古郷へ入り老母と孝親ゆい或は富士筑求
まぬ所有雞山切所小游行して道と修一の更以前小易らりりるを
廣足又心小想ら彼小角國の掟と犯せしも罪を遂不赦免と
り我身小後難と及て不如公の手と借て誅せんふとて又高市王へ
誅して曰く入役小角流罪小行れと怒り配所にて帝と兎咀し由
其ゆえあを早く誅しむを必と天下の害とかりゆと告る小依て
高市王す此傳言小惑るれ翌年十月廿五日武士と伊豆の大島下り小
角が罪と弘明一帝と綱伏しなる更緘あを誅戮を命せしと

る。然小廣足武士未賂賂と贈り。自他とも小角と誅とをかり頼り。武士心得
て大嶋下り。鷹の丸向小角及小角と曳出断罪とて勅命くと偽筆の
宣命と續させれ行者少も恐る色なく敷皮の上ホ端坐し手小大日の印を
結び只不動の真言と唱自若とておろく。太刀取の武士其後回。太刀と揚て
首と下斬小拾も盤石と切りぞ。太刀二段小折役者安然と。太刀取是も太
刀の悪もなれんと太刀を取て再び曳とけ声と斬ふ又三段小折て行者
悠然と有合武士も憫んで叱せり其時行者徐小後と顧ゆい先小續
宣命小帝と兎咀しなる罪小依て死罪小行とあれと我曾て帝と兎咀せり更
かり修とる所八天安全の祈のまに。然小依罪か我を誅せんとして其
乃大賊なり若強て我と斬んとせし却て禍你小が身小及小且又宇南三年の同大
早魁して万草盡く種とせんと仰多小と武士と大心も夜士行者小罪

たゞびく都へより行者の告のひすと奉聞りて帝大に不敬なりと博士
と召れりトその博士是と占て彼人素り罪なく大聖者なり凡人非
むと急ぎ罪を免し尊敬し奉聞りて帝深く御後悔し
大鳥(勅使)とて行者の流罪を赦免あり都へ召して御尊敬せしむ彼
廣足ハ無科多し聖者と絶害せん巧一糸無道なりと官と利領地を没
収し追放しひたり是より役行者の験徳倍せ小高くや久飯依さる
者愈まり行者ハ勅免を得てより悼る所なく天下を往歴し山城國小
公愛宕山檜州小鬼取山伯耆大山筑紫の長山加賀白山越中の立山羽別
羽黒山其餘人の通がる難山高山谷岡れて佛場となりて所故奉まらる
小僧あつども其後文武天皇の大宝元年辛丑行者六十八才して老母と歎
内小坐せし見と推して漢土へ北渡りし其終る所とまらざりて實本朝の神

と八役の行者と謂ふ○後年道昭律師入唐て諸所の靈場と回り新羅寺
あり法花經を講せし時仙客多く来りて鏡法を聽聞せし其申小人
の神仙倭國の語とて道昭と經鏡と議論する更道昭怪し我本國の語
小通じし脚身ハ何人ぞと問ふ仙人答て曰我ハ日本の大行者役の優婆塞
と道昭發た諸ハ及びり役の小角あて在とると高座を下り倭國乃
更と語合て時の授る我覺む其結の中ハ行者が曰我此唐山へ來つる年月と
送るころども三年一度は必ず倭國へ飯り金剛山葛城金山峯山富上山等
小く道と煉修と是日本の國恩と心ざるあかりと語りて去りと
因ふ曰役の行者唐山へ北去りし後年月とて大峯小大蛇描各登山と
とく喰ひしを諸人恐て峯入とる者なくも役行者の遺跡毒蛇ハ抽
と成りて御小入皇六十代醍醐天皇の御飯後僧聖佐僧正と中八光に



役
小角

官吏の行向
役の
小角の捕
入
小角の捕
雲中
赴
此の
住方
云



都捕手

脚孫まご在あるが大勇猛おつりの名僧なまにて修験しゆげんの道みちを好このむ役やくの行者ぎやくなり
慕あこむ所有あもる名山みやま聖地せいぢと徑歴けいれきしむる所ところなり。然しかも大峯おほのみね全ぜんて蛇へびに食くらは
る者ものありと云いふ。大峯おほのみねと持もつて高岳たかだけを刈かりむ。大峯おほのみねへ分わけ登のぼりて果たまり
て大蛇おほなへび出いで僧そう正しやうと吞のむ。或あるは聖せい密みつ師し少すくも恐おそれぬ。持もつて大峯おほのみねへ下くだり
蛇へびをすくふ斬きる殺ころす。ゆゑ再び大峯おほのみねと関せきを熊野くまのへ通とほり路みちをも平ひらげぬ。ひかり
さるふ依よつて緒いと人ひとさる大峯おほのみねへ上ある。更さらと得えたり。三密さんみつ院いん派はの符ふ小峯このみねと
附つく。此この謂いたり。修験しゆげん道の行者ぎやく小本こほん山派さんぱ。當山派たうざんぱ。真言宗まごんしゆ宗しゆにて醍醐たいご三密さんみつ院いん派はなり。
天台宗てんたいしゆにて聖護院派せいごいんぱなり。當山派たうざんぱ。真言宗まごんしゆ宗しゆにて醍醐たいご三密さんみつ院いん派はなり。
聖護院派せいごいんぱ。七月しちがつと峯入のみねいりの時とき。三密さんみつ院派いんぱ。八月はちがつと峯入のみねいりの時とき。夏なつの峯入のみねいり
入いる。西派さいぱとも逆さかの峯入のみねいりと稱なづり。○因よて大峯おほのみねの鐘掛かねかけ八はち路ろ。至いたりて十じゆ人行場じゆぎやうばう
第一だいいちの難所なんじよなり。往昔むかし維いが所じよ為なりともあらず。此この所ところの鐘かねは、

小曰遠江國佐野郡原田村長福寺天慶七年六月二日とあり。其由未ゆゑ三尋さんじん。
小其頃遠州原田村長福寺の門前かどまへへ入いる山伏やまぶしあり。身み貧ひん小こして山峯やまのみね入いり
更さら能あたりしを長福寺ちやうふくじの住僧ぢゆうそう是これと憐あはれ。毎年まいねん路銀ろぎんの合ありて峯入のみねいりせ
しめくる。其後そのち住僧ぢゆうそう年とし老おいて隱居いんきよし。後住僧ごぢゆうそうと讓ゆづりて其後そのち住僧ぢゆうそう當あたる
更さら先住せんぢゆうそう小倍こばいせり。然しかも怪あやしむ。彼か山伏やまぶし不あ敢あて路銀ろぎんを借かりて偽いつはりりて曰い當
寺てら六鐘むつかねの外の外金銀きんぎんといふ者ものなり。是これも依よつて山伏やまぶし。其年そのとし峯入のみねいりす。更さら能あたり
る。或あるは夜よ一人ひとりの年とし老おいる山伏やまぶし来きりて長福寺ちやうふくじの鐘かねを提ひて。座ざを
と能あたり行いく。大峯おほのみねの絶壁ぜつぺきの巖いわの上のうへ小件せうけんの鐘かねを掛かけ置おき。夫このより其所そのところを鐘
掛かねかけと号なづく。彼か老おいる山伏やまぶし。役やくの行者ぎやくの化身けんしんなり。此この外の外未ゆゑ世よの今いまも此この道みち
役行者やくぎやくの奇特きせきと現あはれ。更さら數かずれど神變しんぺん太た言ごん菩薩ぼさつと稱なづく。是これも宜よろしむる。
釋道照しやくどうしやう与よ龍神りゆうじん鐘かね。入い寂じやく火葬くわさう濫觴らんさう之の條じょう。

文武天皇四年春三月奈良之真寺の僧道照入寂を仰此道照が河内州内比
郡の産小て俗姓と船の連と呼又八惠家とて儒業をわたり道照は道
次好も出家して孝徳天皇の白雉四年遣唐使小徒ひ入唐して并し唐の
靈場と廻り博識の僧と尋て緒経で学ひ究り長安小いりて三藏
小錫し其高德博文なりと尊敬して徒弟とかり経論の温興と学び
此三藏三藏とより唐の太宗皇帝の皈依僧也其道德高く曾て大般
若経の未と唐土へ渡りて致れ天皇へりり路上の千苦万勞と凌死遂小大
般若経及諸の経と得て帰國せり程の名僧かりたり道照が俊才剛記あり
と愛し寺中小寄宿を教導れれ道照好む所かりて寢食と忘れて
学ひ緒経の秘決と悉く授りたり小を玄辨道照が学業成就せり人々今六
古御へり倭國の衆生と化度せよ但し佛教の廣く大いなる変究真へり

你禪法とて日本へ流布せよと座禪根心の法と口授りたる道照大に歡喜
昼夜座禪工夫心を煉遂小大悟とる更と得たり師玄持の法思と深く
謝し帰國の辞別を乞ふ小を特許し別離小臨とて佛舍利經論若干片
授け又一の鑑とよて曰此鑑我西天にてある羅漢より授り持歸て平日小食
物と煮て嚙する小身軀健ふたり緒病愈るといまたり真不思議の名
言かり今你小よるから倭國へ携歸り緒人の病苦と救ひ功德の種と植よ
とゆえれを道照三度押載て尊恩と謝し遂小袂とふりて日本へ入る
小便船とて乗頭て大洋へ乗出風小任と船と走らせり小數日とて船中
の者多く病と得て悩む道照師より授りたる鑑然り出し病と煮て
患病者小喰しむる小衆人病頓小治りたり皆大に悦び其鑑如何の名
言多れをが奇特のゆと向小道照即ち玄持が語りし趣を結せり

船中の者大い感^んに^ま城^の廿^の難^有室^をり^をを^を貴^びる^其後^又數^日と^り
日本^の地^も近^く成^るる^お如何^かも^更お^や忽^ちら^船大^海の^上お^居り^て一^寸も^動ら^ず
水^主揖^取大^い怪^とて^曰今^頃風^はわ^らふ^船の^進ま^る何^れ也^と百^般お^もれ^ど
船^の動^るも^更三^日三^夜お^もれ^ど船^中の^者大^い難^は是^常更^に
あ^らむ^と比^面色^如菜^花恐^るる^お中^小入^と塞^小積^れ者^有て^卦と^まと^りて^言
々^々は^是龍^神需^る所^有る^お更^に船^と留^めり^{たり}若^し其^需る^物と^まと^りん^終
小^此船^と海^底沈^めて^も取^んと^まへ^し命^小換^る室^かり^各所^持の^品と^紙小^書
て^海に^投入^其沈^じ物^と海^に沈^め布^とり^おも^と衆^人は^意と^銘く^所持^乃品^と
紙^小紀^道照^も佛^舎利^経卷^鑑の^書と^紙乃^と海^底沈^めと^り衆^人口^を
乃^紙糸^と浮^く流^と只^道照^が鑑^と書^し紙^乃と^海底^沈め^とり^衆人^口を^道
樹^へ借^ると^龍神^脚僧^の鑑^と欲^すと^り早^く鑑^を海^に投^入の^又と^言々^れ道^照

照^敢て^昔ん^せと^此鑑^龍神^小借^らふ^あれ^我師^{より}諸^人の^病苦^と救^ふ
と^賜り^てま^れ龍^神小^子の^留り^て你^個も^先小^此鑑^の德^も病^苦
然^る免^れま^りあ^らむ^とと^投入^を氣^色な^るを^衆人^大い^困り^仰せ^り
さ^る更^かれ^ども^若鑑^と惜^むる^は此^船龍^神の^まお^覆え^れ我^後ハ^な更^に
かり^却僧^も俱^不底^の水^屑と^り悪^魚の^餌と^{かり}身^を船^に貴^い鑑^と
かり^も何^の益^もい^なれ^世お^二な^れ密^かれ^我亦^とも^惜れ^更限^をれ^と龍^神
神^の望^む上^六力^を願^ふ船^中の^者の^命と^助る^を頭^と以^て船^板を^敲き^手
と^合て^拜異^口日^喜お^もて^止ま^れ道^照も^今入^辭を^遂に^鑑と^記
海^中に^投入^るは^最惜^むる^事なり^斯に^鑑海^中沈^めと^り忽^ち
れ^出素^り帆^と上^へ俟^待船^をれ^追風^を受^てま^る更^失の^とり^船
の^者ども^魚生^心地^と恰^合の^限なく^道照^と佛^のと^拜り^てま^る

海より行吏敷目して遂に平戸の浦に着船し久し道照の船を下て和州
奈良より元興寺の内小一宇の禪院を建て住し普く禪法を弘通し日本
禪宗の南祖道照あり緒國の僧道照が辰朝と傳ふ我もくと聚りまじりて
後氣となり禪法を流布し悟道者多し道照中緒國を遍歴して
路から所路を造り水便せし所池と堀井と穿て耕作の便とし又行旅
の便に橋を掛運送の便小船を造り世に益する吏古の行基小笠原山背
國守治橋中道照掛始し所なきも道徳の知識ある貴賤も道照を敬
ひ尊まざるが。當今武も道照と御飯依あり推し内裡に自ら経綸を統
せし御聽聞まじりたる然るも道照行年七十二才小して何の悩る吏もあ結
伽扶坐して入寂しりり帝甚に悼惜まをの承る元興寺勅使と
其九と紡る糸帛朱敷ホと賜道照留て末期小使弟以祀た我入念す後

ハ亡骸と火葬せよと遺言多小依後弟亦遺言小從ひ栗原の野外小於く
柴と積茶毘りたる小と五温の形體二斤の煙と消ゆれど名は後代の書史亦
残りり是を本朝火葬のつめわりたる

日本追儻起源 文武天皇崩御之事

日四年對馬國より始て金と献りる小と帝齋感斜めを先例小任せ對
馬國司小贈官賞祿等と賜朝廷の群臣皆其祥瑞を拜賀し是
小因て年号と立大寶元年とかり以後年号と立定式と立と詔命
しゆ丸是まで大化白雉白鳳朱鳥ホの年号われも未だ定式なく或は年
号と立或は年号われも有ども此帝の御宇より定式とかり此以後の帝小年号
あれハ在さじ故小緒書小の大寶と以て年号と立る始也と記せり備太皇
年正月元日帝大極殿に出御す御門の正面小鳥形の旗と立る宮殿

左の日の御旗及び青龍朱雀の旗と建右火月の御旗及び白虎の旗と
建させし後世まで大禮ある節ハ皆此儀式を用ひ例としり。は正月丁
巳日大学寮於て始て釈奠の禮修せられ大聖孔子の像と祭り抑儒学
を仁徳天皇の御宇儒書始て吾朝渡り直岐王仁を本朝の儒道の祖と
しともいふ。釈奠孔廟の義ハあるも小當今此義と始りてより天下の人民
儒教と重んじ仁義礼樂の大祖と崇まると知り。城小儒学の日本開けし此
帝ハ御功なり。は年十月太上天皇統三河國御幸仰りひるる小都還御
乃後忽ち御不豫ありしせのひれ。帝と首より公卿百官大々小致に医官
と和漢の良方と充て御茶と献り緒寺緒社ハ御悩平愈の祈念小丹誠と凝
し。且又天下ハ大赦を行つて緒の罪囚と赦し放し。百人の僧綱を召し金光明經
を續編させし専ら御平愈と祈らせのひれ。天數満させのひるるや終小

十二月小登霞かりのひる。太上皇山崩御させのハ前緒臣下ハ御遺詔有るもハ
朕死去とも務を廢し喪小籠る更勿と万常の如くして帝と補佐せよ葬式
の更も儉約と昔より無用の礼式ハ財と費さず何更も質素なり只野外ハ
送りて火葬せしと宣ひ置せのひる。此君ハ前條の如く婦徳と脩りて
天武帝と危乱の中ハ佐のハ宝祚小即せのひても神と崇め佛と敬ひ父を
勸め武を厲し。臣下と恤み民を憐れ世と泰平小治め。ハ彼唐の則天皇后ハ政
と専ら。淫樂と恣ふして。純傍と千載小遺せしとハ雲壤の違はる女君あて在
る小天數ハ免まの更能と終小若翁姑射の山ハ行幸かりしとを悲しむ。當
今乃御愁傷ハ申も疎れて。滿朝の文武乃臣下悲歎の紅淚小袂と後らぬを
下万民も赤児の母と表ひし。號哭する声野小元々。然とも斯て有果ハ
あられが御遺勅小任せ葬式の礼を敷(飛鳥の岡)にて茶毘しむるなり。

王火葬の始なり。帝ハ涼園をこせのひ翌年の正月ハ朝拜の儀と廢れ
親王以下百官百司太上皇の殯宮緒齋りて拜礼せれる。太上皇崩
ちのひ一更遠く異國中て中々新羅王より使者を以て喪を吊ひする
宣君不幸自去秋疾以今春薨永辭聖朝朕思其香君
雖居異域至於覆音而允同愛子雖壽命有終人倫大期
而自聞此言哀感已甚遣使吊賻
如斯異國の王まで太上天皇の聖徳と慕惜も有り。斯て帝ハ倍朝政を
正しく布のひ諸國(官使を遣されて)諸州の智能ある者と稱し奉過失ある
者と緘り黜る。是亦依て上下皆學問を勵む行跡を慎む。曰三年越中
國小立山権現を勧請を願ふ。秋教興かり帝又詔命して美濃國小岐
山後木曾作のりを用ひせり。同年夏五月帝西殿の樓上よりせのひ四方の風景を瞻覽

在りたる小西の天の方て五彩の雲變遷とて脚覽。甚と龍顏嚴く大い
愛與のひ多れ。君前侍坐公卿皆起て祥瑞とて慶賀し。是より秋
小因り則ち改元あつて慶雲元年とてのひ窮民ふ三年以前の未進を脚覽
有る由と觸さめり。のひ貧民大に賑ひ。或は限り。然るも其年乃秋
の季より冬小至り。都も鄙も疫癘大に流行て。家々戸々病臥死亡する者
甚と多り。加へて師是と憐愍のひ冬十二月始て饑の式とて。せ疫神に饗
ひせのひ多れ。其徳をてや疫病漸次小止。是吾朝饑の推興。未代に
朝廷乃恒例とて行はる所なり。民間前年の夜小社谷榎の枝とて。戸小拵り。豆
爆て屋内小撒し。鬼兮外福兮内と唱るも。此饑の式とて。摸する所。最古の行
事なり。斯て慶雲四年より四海太平なり。多る。心ち帝脚悩ふ。ついでに
以の外脚大吏。小入。え。せ。のひ多れ。而母太后の脚發。馬ハ。も。更。なり。皇后皇。塔

親王緒大臣其他百寮の官人まで大に驚き良運肺肝と確て医療にせ緒
 社の神官御怒平愈の祈禱丹絨を厭ふ緒山の碩徳ハ病息即滅の大法秘
 法小身命と抛て祈れども定まる御更いや露をうりも其驗なく慶雲四年の
 六月中旬終小雲隠させり御在位十年宮筭二十五才小在る噫悲の
 うみ此帝ハ堯舜の仁徳も劣らせのを神佛と御崇敬深く分て御孝心
 漢の文帝も勝りせりの御君幸あが受と好之經史に通し詩歌小御秀作
 多く射術を能御鍛煉ましく万民之恤を御更母の赤子と慈むごとく九年凶
 作必と民の貢税を免り流行病ある時ハ人民小医業賜以孝順の者
 小ハ賞金とあふ廉節の士六奉用ひひ其の法を定て刑と輕く博奕を禁
 じて風俗と正し儒学の道を隆かり弓馬の術を勵りし聖君とて
 せのいふ奈何かれ皇天壽と貸ましくも三十七才も満せりごとく山崩御

させりごとくと天と怒り地と恨て万民徂小泣倒悲哀とる事限かり朝廷小ハ
 人々波あが尊嚴と推し収り奉御遺勅小任せり先帝と等しく起鳥が岡
 小て火葬小かりしりり斯て後緒御評議ハ皇子ハ御幼推りしをとて
 先帝の御遺詔と演御母君小帝位と勸めよる御母太后固御辞讓ヤ
 まり先れも緒御強て勸めたり先を已更と得りごとく遂小終りひり
 元明天皇御即位 從武藏國獻始銅條
 先帝の御母君御遺詔と緒大臣の勸め黙止さく御孫皇子の御成長
 在るを思ひ思百歳小口年秋七月大極殿小於て宗祚小即り此君を入
 皇四十三代の帝元明天皇と奉る即ち天智天皇弟四の皇女とて御
 子の宮妃小させり先帝と生せり持統天皇の御妹なり御
 天津御代豊國成姫小名河内皇女とされり時小室小亮四十七才

又皇儲御即位在御。翌年正月武藏國より始て銅を獻じ、皇太子は
銅を産する始り。天皇斜め守、感感す。武藏の守護人、皇太子
祿と賜り、年号と和銅元年と改えり。其三月紹して和銅平城を都
造じ、是は去年御即位の後、緒大臣経儀の上平城を都の威を勤
められも、天皇勅許去り、けて宣ひ、多ハ朕不徳の女身と、以て萬乗の宮
位を汚し、更天神地祇の照賢と、恐るとり、御遺紹黙止、く皇太子
御成長在、假九五の位と踐ども、先帝皇女、駕より、未だ幾干乃
日、然も経ざる小遷都せ、憚あり、具財用と費、民を勞さんと、宣ま、あち、
と固辞し、ゆい、其儀止、此春又、臣舎人親王、弟三の皇弟、諸臣下、集
再ハ遷都の評議と定め、斯と奏聞有、多ハ天皇猶辞し、ゆい、六舎人親
王階と進、出奏、多ハ、君國賊の貴民の疲勞と、厭、六御理、ゆい、

近代帝王室筭短く、ころころせの、更、心、六都の地相應、あ、ま、ざる、故、ゆい、
夫、熟慮、る、小、往古、より、已降、日、代、揆、と、星、を、瞻、て、宮室の基、と、起、し、世、を
トハ土地と、相、て、帝王の都、と、建、る、更、永、鼎の基、と、定め、無、武、躬の世、を、周、む、る
所、小、と、敢、て、者、移、逆、樂の、為、ハ、ハ、ハ、昔、殷王、ハ、五、度、都城、と、遷、て、中、興、乃、號
と、受、周、后、ハ、三、度、都、邑、と、易、て、太平の、稱、を、致、せ、り、臣、平、城の、地、勢、と、相、ハ、小、実、小
四神相應、一、三、山、鎮、之、渡、の、勝、地、方、故、ハ、先、帝、も、都、と、平、城、小、遷、人、と、の、感、慮、不
て、在、り、れ、ども、時、勢、の、御、違、り、て、默、止、の、ハ、早、ハ、崩、御、ち、の、と、を、先、君、の
御、遺、念、と、暗、さ、せ、り、為、狂、臣、等、小、任、せ、り、と、諫、奏、有、多、ハ、依、て、天、皇、ハ、
勅、許、し、の、ハ、都、造、の、宣、上、と、下、り、の、ハ、ハ、ハ、諸、卿、奉、り、百、工、を、召、寄、平、城、小、
造、と、令、し、成就、を、急、せ、れ、り、年、夏、五、月、紹、して、銀、錢、を、鑄、さ、り、め、り、ハ、
倭、國、小、錢、を、用、る、と、ハ、皆、異、國、より、渡、る、錢、を、て、日、本、小、て、錢、を、鑄、ハ、此、時、を、知、り、

其年の八月又近江國わく銅錢を鑄さるる和銅開珍の錢是なり
因小曰此後淡路の廢帝の御宇小錢を鑄さるる所謂高年通寶太平元
寶開基勝寶錢是なり又仁明天皇の御宇小錢さるる八長年大寶なり
又拾芥抄不載八神功用室承和昌寶錢益神寶貞觀永寶延喜通寶
乾元大寶寬平大寶隆平永寶ホカる。神功錢ハ稱徳帝の御宇承和錢ハ
仁明帝の御宇饒益貞觀の二錢ハ清和帝の御宇寬平錢ハ宇田帝の御宇隆
平錢ハ村上帝の御宇小鑄之也三才圖會小憲別記小曰吾朝の錢六文和銅
萬年神功隆平乾元の五錢を日本の錢と稱一延喜錢を倭國の錢と稱と云
日圖會小曰錢を引て日本の錢四品一和銅開珍二神功開寶三萬年通寶
四隆平永寶とあり抑錢の形ハ天地の象より外の四ハ天カク内の孔の方なるハ
地カク孔の上下小時の年号と記とて天下小通用と魯亡カ錢神論ハ錢を無足

走と号せり身無足してまゝの細なり和名小錢を足して婦女脚足と稱さるも
此義小因リ又鶴とり鳥の眼小似るカ以て鶴眼と異名一倭人ハ鶴眼の二字の
斤と作と取て鳥目と云又銅と青く錯るカ以て青銅とも云
斯く銀錢銅錢世上通用されバ大の世の融通と人民悦と限なく然ハ奸欲
の者有て己カ利を得んと私小錢を鑄て公の錢小混ト通用せりカバ天皇此更と
聞百て此義如何有なると臣下小同ハ執政舍人親王ヲさるハ此義甚惡を更
たり早く停止なりカる。凡錢世上よりカる時ハ錢の價賤なり諸物の價亦
たり人民困窮ハカる。今早く停止しカる後代追々私小錢を鑄る族出未
錢の價倍賤なり物の價亦貴くなり世の乱を引出しハ人夫財寶ハ上小
る時上下と怨。財寶上よりカる時上下と慢リハ者カク天下通用の財と下
任せ小鑄させり政通乱と禍害生ハカると奏聞ありカるハ天皇此更と

召乎小丁民觸之其小錢を鑄る者あつて重く死刑を行ふ。辨人を有る者ハ賞錢を賜ふ。其犯人を知りて辨ざる者ハ罪なきとたり。是亦依て私小錢を鑄る者大いに此れ其後ハ錢を鑄る者なくたり。

山城國稻荷勸請之吏
平城都遷幸

去程小和銅三年小平城の都成就し、依て天皇群臣と從へり。行在を整へ遷都なり。石上上居と左大臣任じ、藤原の淡海を右大臣小あり。淡海公悦喜限り、深く天恩を謝し、且奏聞し、臣又鎌足存生の昔、臣猶我蝦夷又子と亡滅ん、三寶小願と、輒く賊臣又子と夷滅し、のく一寺と建立し、靈像と安置し、と誓す。祈ひ、小佛菩薩力を添ふ。故小や安く蝦夷入鹿ホと殊滅し、ひひき且亦依て一寺と建立せんと、思ひ、公願

其義と果さず死去ひき臣又父の志を嗣堂宇と建立せま、欲し、公務敏系乎、今日追默止ひ、小此頂漸く暇を得、當所小寺と建立し、亡天宿願と果し、一萬望勅免と庶幾す、願われ、天皇歡開す、奇特乃義と御感在て子細かく勅免なり。是亦依て淡海公平城小大伽羅を建立、與福寺と号し、丈六の釈迦の像と安置せ、れ鎌足公の宿願とを果され、和銅四年小天皇万民の五穀成就と御祈の爲、山背國紀伊郡飯盛山小稻荷社と造立し、祭る神三座倉稻魂太田命大宮姫以上なり。日五年正五位上太安麻呂古事紀三卷と撰て、献る。日年始て賀茂祭を行ひ、又此年陸奥國を久々出羽の國と置り、六年丹波とて、丹後と、備前と、分て美作と、日向と、分て大隅と、分て、又緒國の風土紀を作し、め、日七年布衣及の長と、丈六尺小定め、如斯萬東國益ある吏と始め、日政道正、き女帝、在り、日八年、緒國と

大不旱して春より夏に至るまで雨降ざりて緒國の農民早魘困窮する
甚し天皇大不歎せのひ是天より朕が不徳と責む所なりとて緒山の僧綱八幡
雨の法を修せり緒社に幣帛を捧て雨を祈せのひ御身
供御と断せのひ宮中にて天地を拜し雨を祈せのひ天神地祇も其御丹誠を
感ずのひ三日多く大雨降出り數日膏雨降るる更緒國も等しく枯草
田畑潤ひ多るを万民勇々悦び深く天皇の御仁徳を稱都の方を三拜せぬか
けり然も天皇御生貨弱く在る小稍年も老させのひ朝廷を聽し不願
思召群臣と儀て皇女氷高内親皇小帝位を讓せのひ是先帝乃皇太子
いませ御幼羊をば万機乃政を委なうとの御妻なり此氷高内親王とやせり
草壁皇子の御女を文武天皇の姉君とせり此君も御母天皇とひく
婦徳を具のひ寛仁温順の御本性史密作と繕せのひ内親王敷度御國

辞ありたれども天皇敢て許しをばり多る已更と得のひを遂に御承りしなり

元正天皇御即位

從近江國獻聖龜條

皇女氷高内親王帝位を受嗣のひ和銅八年秋八月大極殿小於て御即位
在り群臣の拜賀を受のひ此君も人皇四十四代元正天皇とやなる御緯日本
根子高瑞淨足姫又氷高内親王と稱すと密書二十六才をたせのひけり
即ち先帝毗小上天皇の尊号と奉りのひ文武天皇の皇子豐饗養皇太子を
太子小立のひ後小聖武天皇とやなる此皇子なり執政の全人親王左右の大
臣も石上淡海をて万端前朝と更る更なり是る所八月下旬小江州浅井
郡の漁夫亦一甲の龜を推りて平城の都へ上り高田首久比大呂小就て龜を
我徒湖水にて網を曳り所湖の面小雲氣多し更不測小思の其所(網を
下)曳揚りて廿五珍り龜網小くをい小付捉て獻上いとたり久比大呂

て亀と受とり朝廷へ献り漁夫ホガヤセり冬と養厚しを天皇諸臣と是を
睿覧しり不実希有の龜也。長七寸闊六寸左眼白右眼赤頸小三
寸と著し背小七星と肩前脚小離の卦あり後脚小又あり腹の下赤白の
点ありて八字の象とかなり君を先りたり緒の公卿是龜とて真小希
代の聖龜とて感致して止む。申すも舎人親王進出て申され是天より示
しる所の吉瑞にて凡龜ハ甲小三極を備て万年と待とせり往古中華乃
禹王の代小梁河より聖龜現れ出甲小八卦と負り是天地定位の後天の易
なり号て洛書と綴り後年周の文王伏羲氏の河圖禹王の洛書と合せ考す
八卦の易と著し周公且六十四卦と定しり天下の易曆是より起まり其餘聖
龜の賀瑞倭漢とも例あり當今女帝小在せども聖徳と備りて故脚即
位の始此祥瑞を示しり所ふる處とて冠を傾け慶賀し奉られらるるを

左右の大臣より並居る公卿皆萬歳と唱へ賀瑞と祝しりるる天皇聖龜
小麗しく睿感在り久比上宮乃漁夫不賞禄と賜ひ和銅八年と改て聖龜元年
と申すひ彼龜ハ再び湖水放しりめひり其後天皇緒の文官武官と召れり
勅詔しめひり朕不肖の女身とて十善の寶位小即聖龜の祥瑞を蒙りりる
も敢て不徳の身小應せざらむ是皇天朕小政務と正しりせりんと脚城たり
を。これを天下泰平小五穀成就し万民豊饒ありん更願かり夫耕作ハ時寒暑
の遲速を考て耘り耕との時と過らざるを善とてるとや夫寒暑の遲速を撰みハ
曆より善かり如何せん五圃いさる曆か多かり万民耘り耕との時と過らん更か
ハ朕是を患あれ中華の古小做り万代不易の曆道と起り天下の民小詠日月の運
行と年々寒暑の遲速を考る更と得て種藝の時と違きりん更と改せり
國古より曆と用ゆると也。是漢朝の宣平曆天竺の宿曜曆等して五圃の

あす日月の運行の萬國とも易る更有るをれども風土不倚て寒暑異るる異
國の曆をて入季彼の等しくも更無とも謂が。願く日本曆を製永く萬民
乃便を得きまわす。傳聞唐土の金烏玉免集とて曆を作する法と記す書讀
右と之。其書と借得て吾朝の曆法を起さんと思如何と宣ひを列位公卿
紹と奉りて美難有慮慮を感奉り。又想々唐土渡り其秘書を
借得て歸朝せん。凡庸の者の及所あらず。此御使を奉らん者維あるん
と列卿と慙と黙然とて刻を殺さん。時小舎人親王少時勅て中されたるハ
滅小難有勅詔わて仁恕是小勝る更ハハ。臣彼金烏玉免集の義と祖承り及ハハ
彼書本ハ漢主雁州城刑山の白道仙人の天竺より五臺山小舎りて大聖文珠菩薩
薩を拜し。叔尊の鏡のハ所の大集日藏月藏の二經及び名曜曆等の本文地理乃
與義と傳受て漢土飯り。伏儀氏の運氣論ホと考合して一卷と著り日月星宿を

撰り知術を具ハ蓋管益内典金烏玉免集と号と名。後唐帝傳り代珍藏して
當時玄宗帝小の深く密藏秘。天学曆官の他大臣と父の喜り小藏する
更を許されと承り。他國を猶以て借渡され。ハハ彼書と借得ん更
龍の腮の玉と得より猶得る。ハハ。然れも万代天下の人民の爲を思召。睿慮も又
黙止まり。臣群臣の中。俊才明智の人を擇んで入唐させ。如何ゆと彼玉免集
借得き。ハハ。奏し。ハハ。天皇斜めを欣悦。ハハ。卿然る。ハハ。計
ら。ハハ。統。ハハ。其日の御評議畢て君帳内ハ脚まり。ハハ。諸卿も皆退出で
られ。斯て舎人親王ハ歸館の後。熟朝廷の諸臣の中。小量量衆小勝。ハハ。子
人を見彼と思。ハハ。是。ハハ。思。ハハ。才子。ハハ。無。ハハ。友。ハハ。小。ハハ。三。ハハ。山。ハハ。禁。ハハ。下。ハハ。住。ハハ。所。ハハ。世
一才子。ハハ。名。ハハ。安。ハハ。部。ハハ。仲。ハハ。名。ハハ。呂。ハハ。と。ハハ。呼。ハハ。り。ハハ。其。ハハ。先。ハハ。祖。ハハ。ハ。孝。ハハ。元。ハハ。天。ハハ。皇。ハハ。の。ハハ。皇。ハハ。子。ハハ。太。ハハ。子。ハハ。命。ハハ。の。ハハ。末。ハハ。孫。ハハ。一
品倉搗。ハハ。名。ハハ。呂。ハハ。の。ハハ。喬。ハハ。孫。ハハ。從。ハハ。位。ハハ。中。ハハ。將。ハハ。大。ハハ。補。ハハ。安。ハハ。部。ハハ。秘。ハハ。守。ハハ。の。ハハ。二。ハハ。男。ハハ。なり。ハハ。兄。ハハ。安。ハハ。部。ハハ。好。ハハ。根。ハハ。と。ハハ。生



安倍仲右

安倍の
仲右
詔と
うら
金馬
王兔
集成
需
か
唐土へ
五人

得行迹正とくぎせきただしし且かつ不孝ふこうなりなり又また船守ふねもりのを不與ふよを受うてて家いへにに追出おしだされる其その行ゆききまをを
弟あに仲なかつ之の宮みや幼稚ちひさかたの時ときよりより智ち才さい方ほう余あま勝まさとと學がく向むかをを好このむむ手て跡あとをを磨とりり又また倭歌やまとうたをを心こころにに付つけ
てて十じゅう才さいのの頂たかよりより詩うた之の賦ふ歌うたをを詠よみみ度たび續つくく書かき経へるる暗くら紀きををいいまましし其その後のち
緒いと人ひと安部あべのの神童かみどりとと稱なづけけりり仲なかつ之の宮みや中なかにに天あま性せい至いたるる二ふた親おや小こ事ことをを更さらにに續つくく事こと由よし未いま頼たのみみ思おもひひ不
孝ふこうのの兄あに好根このねとと追出おしだされる二ふた男おとこ仲なかつ之の宮みやとと嗣子ついでこととはは多おほくく仲なかつ之の宮みやがが十じゅう三さん才さいのの年としがが元もと没なしし又また小
事こでで信しん孝こう行ぎょうとと尽つくく十五じゅうご才さいのの年とし又また船守ふねもり錦部にしんべ首くび良形らぎょうがが女め石いし州しゅうととなるる者ものを取とりり
仲なかつ之の宮みや妻つまととなりり其その年とし小こ船守ふねもり病やま死しなる仲なかつ之の宮みや又またのの名跡なあととと嗣ついで朝あさ廷てい不ふ勤きん仕し
一ひと々々舍とけり人ひと親おや王わう不ふ斗と仲なかつ之の宮みや更さらにに思おもひひ出いだだされる独ひとり膝ひざとと拍たたきき緘せま我われ安部あべ仲なかつ之の宮みや有ありり有ありり更さらにに
女め心こころをを今いま朝あさ廷ていのの臣おみ下した多おほくく又また俊とよ才さい美み士しとといいふふ六む下した道みち真まこと備ひ後のち備ひ安部あべ仲なかつ之の宮みや
兩ふた人ひと限かぎらら彼あのの仲なかつ之の宮みや入いりり唐たう書しよをを必かならず然しか彼あのの玉たま免集めんしゆをを借かりり得えてて歸かへりり登のぼりりをを使つか者ものとと

以もつてて仲なかつ之の宮みやとと召よめめられる仲なかつ之の宮みや頃ころ日ひ少すくくく不ふ快たいとと家いへ小こ引ひきき電でん朝あさ勤きんとと念ねんりり多おほくく
病やま平ひら復たがひられる八はち明あき日ひ八はち朝あさ祭まつりとと沐浴ゆよくととせせ所ところ小こ忽たちちち稷むぎ政せい舍しや人ひと親おや王わうよりより脚あし使つか者もの
來きりり急いそにに館たねへへ來きるる館たねのの妻つま也なり何なに等どうのの脚あし用もち使つかとと使つか者ものとと日ひ道みちとと親おや王わうのの脚あし
館たねへへ來きりりたたれる舍とけり人ひと親おや王わう仲なかつ之の宮みやとと客きやく殿てん招まねきき入いりり脚あし對たい面めんありり仰おほせせ多おほくく足あし下したをを招まねきき
とと私わたくしのの要よ用もちありり當あた今いま新あらた小こ室むろ祚そ小こ即すなはちち五ご穀こく成なり就す万ばん民みん豐ゆたか饒にぎはのの為ため日本にっぽん曆れき
をを制つくららせせのの人ひとのの歡よろこ慮りありりもも吾われ朝あさののいいまま曆れきとと作つくるる元もと書かれる唐たう朝あさ乃すなはちち
帝ていのの秘ひ藏かく有ありり金かね鳥とり玉たま免集めんしゆととりり曆れき道みち乃すなはちち書かれる借かりり需もとむむ思おもひひ彼あのの書かれる借かりり得えるる飯いをを
るる者ものとと撰せん今いま般ぱんのの遺い唐たう使つかとと同どう船ふねとと入いりり唐たう書しよをを予よ小こ社しゃとと然しかとと唐たう帝てい
乃すなはちち深ふかくく秘ひ藏かくありり珍ちん書しよありり容よう易い小こ吾われ朝あさ借かりり用もちすす思おもひひをを方かた便べんをを以もつてて
彼あのの書しよをを寫かきき取とりり歸かへりり朝あさをを余あま小こ社しゃとときき術ぎやくなりり是こゝ極きまてて難なん義ぎのの脚あし使つかれる
をを尋よ常じょうのの者もの小こてて成なり就すせせんん更さら覺かく束たかかりり故ゆゑ其その使つかをを任まかせせるる者ものとと思おもひひたたるる小

朝廷の臣下の中、足下にて此御使と仕逐る者あり。とれ、火急の招請せしむ。彼
書と字を取て帰る。誠小難中の難、更おれども君の御為國の為、おれど辞退りて字問
の為と稱して、遺唐使の船、小舟に入唐せられ、仲六郎、飲飲して大い
悦び起て拜謝して曰、朝廷不智能の人、多き中、若冠不敏の我、大切の御使を命
せらる、更家の養、身の面目、何更、身小過、金身不肖、なれども、勅命と首、頂き
入唐して方便と廻り、其玉鬼集と見仕る者、おれど字取を、方寸小暗記、辰朝
仕り、上書記、献じ上いる。と、上々る小、親王御喜、悦有て頼母、思召、おれど
猶、仲六郎が血氣と抑入と、足下の強記、予兼て知、併、おれど異國の帝王の秘書と云
三千余里の波濤と越る、大更の御使、おれど身と慎、心と下、彼秘書と得る、更と專
一、小、おれど、仲六郎、完示、亦、安、貴、意、安、く、思、召、おれど、素、素、り、人、命、不、定、おれど、方
一、彼、去、りて、先、亡、は、る、と、一、念、の、忠、魂、亡、鬼、と、感、も、玉、鬼、集、と、取、得、君、小、献、じ、て、止、い、や、と

さ由、澳、く、言、々、る、小、と、親、王、感、賞、あり、則、ち、仲、六、郎、將、と、參、内、り、金、鳥、玉、鬼、集
と、借、需、る、御、使、外、學、士、安、部、仲、六、郎、命、下、り、則、ち、召、連、れ、と、奏、聞、り、おれど、天皇、も
兼、て、仲、六、郎、大、才、と、聞、召、及、せ、る、と、感、感、ま、し、く、數、の、御、被、物、と、下、賜、り、首、尾、よ、く
彼、秘、書、と、借、得、て、帰、朝、さ、ま、由、の、宣、旨、と、下、され、る。仲、六、郎、庭、上、お、平、伏、て、倫、旨、と
恩、賜、の、品、式、頂、戴、し、拜、謝、し、と、退、出、り、勇、懐、ひ、私、邸、へ、と、歸、り、る。

安部仲麻呂入唐

安部好根奸計之條

仲六郎、妻、若、艸、夫、と、同、年、而、て、十六、才、たり、る、が、己、小、妊、娠、し、と、早、岩、田、帶、と、る、頂、小、成
多、り、時、お、仲、六、郎、内、裡、より、下、道、倫、旨、あり、お、君、の、御、賜、と、上、賜、り、朝、服、の、供、事、
小、向、ひ、我、今、日、撰、政、殿、の、館、へ、召、ま、し、と、何、更、の、御、用、事、と、思、り、お、再、難、得、身、の、大、慶、也
其、故、ハ、當、今、万、民、の、為、小、日、本、曆、と、制、裁、の、事、付、唐、の、帝、の、秘、藏、あり、唐、
多、其、御、使、を、我、命、下、り、の、彼、如、く、倫、旨、及、び、數、の、御、被、物、と、賜、り、る、御、使、召、買

智の人尋死ふ若年の我御見出し小預りも勅命と蒙る更又三夫川より
と名。然も三千余里の波濤と隔り異國へ渡り。帝王の珍藏ある所
需る大義なれむ。何時帰朝するも預め期が。你小預り妊娘
月小及む我小留守中小の。慎み安く出産し。男子小あり女子小あり
言て家と守りし。老少素り不定なり。我と死波と。生む出生の子と我と
思ひ成長と待家成嗣せし。と言せせれ妻大子。孩れ是も何ある御更
とや。吾身斯懐胎も。命を振捨て高麗唐山行の。んと八世小心難面御と
く。傳聞も。ある狂の大臣とやん。を望て唐主。御使小立燈。其至鬼とせれ。忌
れ辱と被りて死波の。いとや。を重れ勅命なり。も此御使。御辞退り。更
と流石女。心弱く涙さ。きて練。れ。も仲小名頭。歩振思。なる者。の言。更入り。か
倫言ハ汗の。と。出て再び返る。命。や。八朝家の緒。臣下。より。中。より。抜出。られて。大切

ある御使と蒙る更家名の。譽身の。面。何。更。り。是。小。勝。る。ゆ。え。唐。土。道。遠。なり。と
り。とも。古。より。入。唐。して。無。恙。帰。朝。せ。り。人。技。擧。る。小。違。あ。す。狂。の。大。臣。の。如。き。不。運。の。人
稀。なり。よ。や。彼。國。へ。横。難。小。遭。或。ハ。小。謀。り。て。異。國。の。土。に。成。る。も。天。命。な。り。如何
せ。り。君。忠。の。よ。ふ。家。と。捨。身。と。捨。妻。子。も。捨。る。が。臣。下。の。常。なり。你。と。り。も。口。に。君。乃
臣。妻。ふ。れ。を。俱。小。勸。勵。と。忠。も。貞。も。り。命。に。然。小。匹。夫。匹。婦。の。と。忠。も。義
も。弁。を。抑。留。せ。ん。と。も。仲。小。名。妻。小。あり。と。も。氣。色。と。衰。て。比。に。懲。り。も。も。妻。も
今。小。練。ん。約。も。か。心。中。や。深。く。憂。む。る。口。火。過。り。成。を。絶。ふ。る。斯。て。仲。小。名。小。難。掌。事
原。江。守。小。留。守。中。の。義。と。死。入。唐。の。准。備。な。り。攝。政。家。より。の。令。と。待。々。る。小。程。あり
遣。唐。大。使。從。四。位。下。多。治。比。真。人。縣。守。日。副。使。藤。原。宇。合。其。他。刑。官。録。事
等。出。京。の。旨。限。小。成。れ。も。仲。小。名。妻。及。小。家。族。家。人。小。別。と。告。遣。唐。使
小。從。以。都。と。發。足。と。西。國。へ。より。筑。紫。太。宰。府。より。兼。船。一。艘。を。解。り。大。海

集出四艘の天船帆を揃てとまらせり時、是靈龜二年六月中旬、舟中、且、流、仲、
六呂の舎兄安部好根、父の家と追出されて、寄べた方、所、小、漂、浪、と、看、
る、小、今、般、仲、六、呂、入、唐、せ、更、と、定、て、忽、心、好、針、を、案、ト、出、平、城、上、ト、三、夢、の、
郎、舎、小、い、と、門、呼、と、と、れ、バ、雜、掌、第、原、江、守、何、人、也、と、出、て、る、小、思、中、も、ぬ、
不、良、人、の、好、根、も、更、由、あ、れ、人、の、未、だ、と、思、も、平、王、家、の、嫡、男、あ、れ、を、為、さ、
か、く、云、関、(緒)、借、只、今、何、の、と、め、脚、入、未、有、今、と、同、好、根、絆、と、慚、愧、の、色、と、銜、以、
今、更、汝、對、も、面、目、も、お、れ、も、我、若、氣、の、過、より、又、の、不、與、と、受、浪、に、て、緒、圖、を、徑、
廻、り、艱、難、の、身、不、迫、る、付、先、非、を、顧、後、悔、勝、と、嘯、も、又、と、あ、れ、又、小、緒、不、
與、と、免、され、ま、り、思、中、小、早、く、父、船、守、死、去、有、と、人、傳、安、大、力、と、落、存、生、
中、小、不、與、を、謝、一、日、斤、時、た、り、と、孝、艱、せ、ざる、代、悔、と、も、其、経、か、弟、仲、六、呂、小、た、り、ん、
更、も、何、と、中、後、同、く、思、ひ、く、歸、郷、の、念、と、思、断、西、國、方、の、團、司、小、身、と、寄、小、不、斗、也、

此度太宰府にて仲六呂、面、會、身、の、先、服、と、謝、又、の、死、跡、の、且、何、更、送、り、紫、逆、
下、り、と、同、小、彼、各、言、て、今、般、遣、唐、使、入、唐、有、小、付、學、問、の、為、小、船、と、願、て、入、唐、し、
たり、彼、土、小、留、學、を、れ、滯、留、何、年、ま、で、と、時、を、定、め、ざ、り、古、郷、小、八、年、若、妻、又、を、
江、守、以、下、召、使、の、男、女、の、と、お、て、墓、く、り、江、守、至、も、ち、我、兄、今、仕、官、志、も、と、小、由、小、
ん、を、是、より、古、郷、上、り、江、守、と、心、を、合、と、我、歸、朝、す、追、妻、の、後、見、を、わ、り、も、れ、と、據、
わ、く、頼、り、也、我、も、又、の、靈、前、お、て、せ、あ、て、不、孝、の、謝、も、せ、ま、り、と、れ、仲、六、呂、頼、を、止、
其、初、小、應、と、て、杖、を、交、ち、身、と、寄、一、團、司、小、仲、六、呂、頼、の、由、と、結、り、暇、を、乞、て、去、る、を、い、
と、弁、舌、巧、小、言、れ、江、守、信、一、く、思、も、否、と、も、言、が、主、人、の、脚、頼、有、義、心、以、
む、主、人、の、歸、朝、の、途、即、後、見、か、む、る、所、と、す、る、小、好、根、仕、事、と、心、中、小、
独、笑、一、其、後、脚、と、面、て、若、州、小、名、對、面、家、内、の、若、小、飯、伏、き、存、ん、と、祥、と、寫、実、
温、柔、の、体、小、と、り、万、事、我、意、の、所、作、り、後、初、小、更、を、若、州、江、守、と、高、懸、

さも信まちふまりてなれるら若ら艸江守も始は心こ小油ち新しなりは好よ根こ心こ新しを新て新
 危あぞたまし小思おの外の忠ち実じの行跡を見みては備た実じ小先せ雅んと改かめし原は土つ成り
 色いろ小こを露あさず手て満み月げ丸まると我わ子このこく偽いつり愛あしこ若ら艸せ心こと悦よろこむこと巧たくとる
 小其年こも暮くれ近ちかくはるら頃ころ若ら艸せ月げ満みて平へい産さん玉たまの如ごとき男おと子こなり多おほく又また夏なつか
 中なのな悦よろこび勇ゆうと満み月げ丸まると号ごう堂どうの玉たまと愛あい慈じ心こと荒あれ風かぜの中なかあらむと号ごう堂どうの玉たま
 うち其年そのとしも程ほどめり暮くれて明あくはるら雲れい龜き三さん年ねんの春はるとあり満み月げ丸まる追おひき追おひき肥あるらと
 らくある成なり入いるら小付せ母はは若ら艸せハ早はやく夫おと小見こ見みせまりく其その歸き朝あとも多おほく且かつ暮くれ行ゆ
 こがれ日ひと送やるらも三さん秋あきと登のぼるら想おもひは多おほく好よ根こハ多おほく若ら艸せが衆しゆ小勝せうして艶あるら色いろ
 かる小魂こたまを奪うはれ我わが国くにの花はな小こせまとと頗おほく戀こ慕ぼの欲よく火か胸むねを焦こせまるらは
 色いろ小こを露あさず手て満み月げ丸まると我わ子このこく偽いつり愛あしこ若ら艸せ心こと悦よろこむこと巧たくとる

皇統記圖會前篇卷之二畢

